

慈光の前に

冷たい理窟では

「私は如何いたしましょう。女の道をふみあやまってしまうました。悪いとは知りつつも、強い異性の力に引きづられて、破倫道を楽しんでまいりました。けれども、来ました。苦しまねばならぬ時は来ました。私の魂の奥底から、それを許さぬある力が動いてまいりました。この力が私の内に表れて来ますと、夜もろくろく眠られないのでございます。もうとてもつつむに堪えられませぬ。どうぞお聞き下さいませ。そうしてお教え下さいませ。」と女はすすり泣きながら、悲しい身の上を告白し始めました。道徳者らしい男はじつとそれに耳をかたむけております。女は続けて申します。

「私は十年前に只今の夫の所へ嫁ぎました。夫との間に二人の子までなしました。五年前に夫は南洋に出稼ぎにまいりました。子供二人をつれて留守居していた私には、決してみだらな考えはございませんでした。雨につけ風につけ、遠く南の国へ出でゆきたまひし夫の君に、病みます日のないように、運よく働いて、衰へし家の再び樂ゆる日の来れかしと念願しつつ、淋しう家を守って暮らしてまいりました。けれども、ああけれども……語るさえのろわしい、如何なる悪魔のみいつた事でございましょう。ある夜から私の前には一人の異性が現われました。そうして私に道ならぬ愛を求めたので御座います。私は必死になって戦いました。けれどもいつしか私の内には醜い汚い心が芽をきっていました。悪魔につかれた私の魂は、ずるずる愛欲の淵に沈んで行ってしまいました。そうして私の体は身重になってしまったのでございます。

私は如何にすべてを呪いましたでしょう。罪なきいまだ生れざる嬰兒さえ、その生れ出ることを呪いました。何という罪の深さでございましょう。いつしか呪われの子は生れました。それから私は幾度となく、この呪わしい愛執のぬかるみからのがれ出でようと、我と我が心と戦って見ました。けれども執拗なる蛇のような異性の愛情と、私の内に巣くう悪魔の力は、ずるずると今日まで私を引きずってまいりました。私はもうとても堪えられませぬ。私の内には、それをきびしく裁いて一步も退かぬ力が現われて、判官の如く私を叱責し苦しめてまいります。私は苦しいのです。どうすればいいのでしょうか。」と女は泣き伏してしまいました。道徳家らしい男は言いました。

「ああそうですか。そんな生活を続けておつて苦しいのは当然な事である。そんなことで、あなたは夫に対してどうして女の道が立つのですか。一体あなたが弱いからいけない。あなたのような弱い者がたくさんおるから世の中の道がすたるのじゃ。」

「私が弱いのです。何とも申しようはございません。けれども今となっては、それをどうにも出来ません。私は苦しいのです。どうかして下さい。私が悪いことは知っております。」

「今あなたは、あなたを責めつける者が魂の底に動くと言うが、それを良心と言うのじゃ。あなたにも良心はあるらしい。常にその良心の言うことを聞いて行つてさえおれば、そんなまちがいはおこらんのじゃ。」

「そうです。けれども今の私にはそんなことよりも、どうぞこの私の救われる道をお教え下さい。苦しくてとてもたえられないのです。今までにも幾度か死を決した事さえございます。ああ私はどうなればいいのか。この罪をどうすればいいのでしょうか。」

「今のあなたのような心持ちを懺悔というのじゃ。昔から懺悔滅罪と言うて、どんな教えでも懺悔を教えぬものはない。どんな罪でも悪かつたと気がついて衷心から懺悔すれば、罪が亡びると言うてある。つまりあなたはあなたの過去を力一ぱい懺悔して、再びそういう道に入らぬことが大切じゃ。」

懺悔とはとつて下さいますな。(これこそほんとの)

「何と言う私の心でございましょう。私の魂の奥底には、その懺悔とやらもしてくれぬ力がひそんでいます。私がこうしてたまらない気持になればなるほど私の魂の奥底には、それとは全く反対の道を行こうとする強い力が働いています。どうか私のこの涙を懺悔の涙とは思つて下さいますな。私はその懺悔さえしてくれぬ、恐ろしい自分を泣いているのでございます。もつとはつきり私の道を教えて下さいませ。私はこのまま二つの力に自分をまかせていることは苦しいのです。」

「それではつまりその男との関係を切ることも出来ないと言つて苦しんでいるのじゃな。そんな事では駄目です。きつぱり今日から切れておしまいなさい。それしかあなたの救われる道はない。」

「私もそれがいいと存じます。今日までもそうしようとして一生懸命戦つて来ました。けれども常にまかされて来たのです。ではやはりこの内なる戦いをつづけて行くのでございますか。ああ、けれどもし万一その恐ろしい力に引きづられていつたらどう致しましょう。」

「そんな弱いことでは私にたづねる必要はない。私はもう知らない。深い迷いに入つたものじゃ。」

女は苦しい胸を抱いて泣いています。

一人の青年は、涙と共なる偽らない女の告白を聞いて、その目には熱い同情の涙が漂うていました。畳の上に泣き伏した彼女に向つて彼は語り出しました。

青「尊いあなたの魂の声を聞いて拝みたいような気がします。そうした生活はあなたばかりにあるではありません。聞いていた私は、私の汚さをあなたの告白の中に見出します。」

女「何で先生にそんな汚さがございましょう。」

青「いいえ、聞いて私の魂もそれなのです。私だつて縁にふれて、内なるものを育てられたらどんな醜さを出して来るか知れないのです。」

昔耳四郎という悪人がみ仏様の御慈悲に救われましたが、そのことを書いた『拾遺古徳伝』には『この耳四郎は至極の罪人、悪機の手本といつべし。今時の道俗たれのともがらかこれにかはるところあらんや。およそこの身において三毒をたたえ、ほかに十悪を行ず。つくるに強弱ありといえども、三業みなこれ造罪なり。おかすに浅深ありといへども、一切のごとくそれ妄悪なり。しかればたれのともがらか、罪悪生死の名をのがれん。いづれのたぐいか、煩惱成就の体にあらざらん。つくるもつくらざるも、みな罪体なり。おもうもおもわざるも、ことごとく妄念なり。』とあります。

つくるに強弱があり、をかすに浅いと深いがあるだけです。そうした苦しい生活があなたばかりにあるのではありません。聞いている私もそれなのです。自分の妻を持ちながら、ともすれば美しい女性を見れば心を動かすのが、あさましい男性の心でございます。世には色々な口実をもうけて本妻に子までありながら、妾をもつて恥とも思わないで暮している堂々たる紳士さえあります。又女の内にも人知れずあなたのような道を歩んで知らぬ顔して暮している人もあるのです。子供があつたことが一層あなたを不幸にしたのです。もし子供でもない時には世間が知らぬのをいいことにしているのです。いいえ他人のことではありません。自身の中にそうした心の動きを見出して常に苦しんでいます。」

女「何という先生のお言葉でしょう。私は何だか、何だか……お救い下さいませ。私は呪われの子を産んだのでございます。私は私のした行為を、私の弱々しさを、私の宿業を、呪うよりも、私は子供のあつた事を呪いつづけずにはいられませんでした。私は悪魔なのです。」

青「それは恐しい事です。道徳や社会の制約は、その罪なき尊き生命の誕生の上に、不義の子という呪ひの名を送るかも知れません。けれどもその一生命が地上に誕生するため、たつた一人母として選び出されたあなたまでが、その洋々たる前途をもつた、いとしい魂の上に呪いをおくることは、何という恐しいことでしょう。あなたはその嬰兒を我が子として抱いた時、全ての呪わしい不純な心から放たれて、至純な、無雑な愛で、輝く愛で抱いてやることは出来なかつたのですか。一如法界、名も知れぬ草一本も、砂一粒も、その存在することを拒まれたりさまたげられたり、呪われたりする理由がありません。厳然として存在すべき価値を持つています。人間という一生命が大地の上に、天上天下唯我独尊の弧々の声と共に輝き出ようとするのを誰が呪うべき權威を持つていましょう。生命の誕生！ それはあまりに光に満ちた、人間の善悪の裁きを超えた大事実ではありませんか。」

女「私はどうしてこうも無智なのでございましょうか。私はあの子が生れるについて、一度も讚美の声をはなつてやつたことはございませぬ。生命の尊厳、まことにそうございました。一つの生命が創造されて生れ出づる前には、その前にひれ伏して大きな力を拝むより外に、道はなかつたのでございます。重ねての罪でございます。でもそうしたお話を承りながらも、私は破倫の道を行かねばならなかつた私の宿業の恐しさを泣かないではいられませぬ。宿業です。宿業です。おそろしい宿業です。」

私はただ責められています。夜もろくろく眠られぬ苦しさに、多くの方に道をたづねて行きました。み仏のお救いも聞きましたけれど、こうした心の傷を持つ私は、それがお救いの邪魔になるだろうと思つて、どうしても全ての教化を受入れてくれません。しよせん私は救いからも漏れているのでしよう。」

青「そののろわしい苦しい胸のまつ唯中に別なる声は聞えませぬか。」

女「聞えませぬ。ただ苦しいばかりです。」

青「同情致します。けれどもあなたの魂の内には、全く別なるささやきが聞えているのであります。」

女「いいえ、私はただ責められているばかりです。こんなにまで墮落した私は、善因善果、悪因悪果、しよせん私の未来は、いいえ今の今から永劫の彼方まで真暗でございませぬ。これが地獄でなくて何処に地獄がございませぬ。私のような悪人が救われる道はないはずです。ああもう生きていくことも呪わしいのでございませぬ。と言つて死んでと思つたこともございませぬが、死することは猶更恐しいのでございませぬ。ああ先生！ 私は如何致しましょう。」

青「泣かないで顔をあげて下さい。あなたの魂の内には、一切人の内に流れる尊い光が輝いているのであります。」

墮落しようとして 墮落しきれない

呪おうとして 呪ひきれない

怒つても 怒りきれない

消そうとしても 消されぬ

何ものにも汚れない、智慧の光は輝いて出たのであります。たまたま、あなたの宿業がおどり出して来た時、あなたはこの智慧光の前にはつきり、自分という者を深く知つて来たのであります。今ここに来たのすらみ仏のお慈悲なんです。

けれども、その鋭い光ばかりがあなたの内に流れているのではありませぬ。全く別な全くちがつたやさしいやさしい慈悲の光、慈悲の光が、あなたに与えられているのであります。声なき声にかわつて私からあなたに、私の救われた体験を通して、言葉をもつて申しませぬ。あなたのその行きづまつたままが救われるのです。『我、汝を救う。』とのみ仏の招喚の勅命があなたの魂のどん底に届いていることをあなたは知らないのです。」

女「では私のような悪人でも救われるのですか」

青「悪人だから救われるのです。」

女「それではこの悪人がそのまま……」

青「我が大聖釈尊は一切人の救われて行く道を説きました。韋提希夫人が救いを求めた時、下品下生として如何なる底ぬけの悪人でも救われる道を説きました。如何なる悪人でも、阿弥陀仏の光明の前には、救われないものはありませぬ。」

女「ああ私は救われるのですか。……有難い……南無阿弥陀仏……」

青「心のどん底から南無阿弥陀仏がふき出した時、救われた後なのです。撰取された後なのです。今のあなたの心持ちを信心というのです。仏心が、汚い心の内に開いたのです。即得往生したのです。永劫の迷いから救われたのです。」

女「何という有難いことでしょう。」
彼女はにっこりと笑って涙をふきました。顔は輝いています。そして彼女は言いま
した。

女「先生！ 私は救われました。私は強くなります。これから強くなります。きつぱ
り生活をあらためます。今まではすまぬことでした。」
彼女は去った。嬉しそうに。